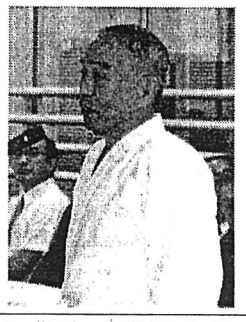
念願の世界マスターズ講道館大会を終えて

世界マスターズ柔道協会会長 日本マスターズ柔道協会会長 野口宏水



「嘉納師範のお写真にハイレーイー」。開始8時半、参加39ヶ国903人のマスターズ柔道家の中の最高齢82歳の真砂部留夫日本マスターズ柔道協会相談役の、リンとした元気な声が、それまでザワついていた講道館大道場の、シーンと静まり返った中に響き渡る。

黒い目も青い目も、白い肌も黒い肌も黄色い肌も、大道場も観覧席も、この時ばかりは異様な静寂に包まれる。観覧席には、それぞれ国民衣装も居るが、大道場の畳の上は国際大会とは云え、白一色の柔道着姿である。否、大会開始直前の8時には一人だけ青色柔道着姿があった。100kg超級、旧ソ連圏のアゼルバイジャンから唯一人参加した選手であったが、急遽、白色柔道着に取り替えさせた。

WAJA大会規定は原則的にIJF規定で行われるが、2点が変更されている（①柔道着は青白にこだわらない、②試合時間は3分、60歳以上は2分30秒）。今大会では①の更なる変更、つまり講道館ルールが適用されることになった。

①柔道着は白色でなければならない。

②道場に入る時は嘉納師範の写真に礼をする。

③道場内では靴下着用不可…。

したがって白色柔道着（ホワイト・〝ギ〟）以外の者は、IDカードを着けた審査員、審判員、スタッフ、プレス以外の者は外国人といえども大会会場への入場は許されない。

かくして、張りつめた緊張のうちに第5回世界マスターズ大会の幕は切って落とされたのである。

本大会への道のり

想い返せば、第1回カナダ・ウェランド大会に参加し、さらに第2回カナダ・ノバスコーシア大会にてアジア地区代表として出席した役員会の席上、第3回アメリカ・フェニックス、第4回イギリス・ロンドンデリーに次いで、第5回は柔道発祥の地・日本の総本山講道館で開催して欲しいという熱烈な要望を引き受けた。まだまだ3年先だ、2年先だ、あ・来年だな…と、それがいつの間にか半年後となり、3ヶ月後、1ヶ月後から目前に迫り、試合前日登録から遂に6月23日大会初日を迎えたのである。

この間、貝瀬輝夫道場管理室長のご勧奨・ご指導により、2002年1月1日付けにて日本マスターズ柔道協会を発足せしめ、同5月10日には嘉納行光講道館長・全柔連会長、竹内善徳IJF副会長・アジア柔連会長他、柔道関係者多数のご列席、又、橋本龍太郎元内閣総理大臣、今泉正隆元警視総監、高橋宏郵船航空会長他、政財界の錚々たる来賓のご列席を得て、麹町グランドアーク半蔵門にて賑々しく発足祝賀会を執り行った。同年6月、日本より地球最西端に位置するイギリス北アイルランド・ロンドンデリーの第4回大会に参加、帰路にロンドン、パリの道場にも立ち寄り第5回大会への自信と不安を抱えながら帰国した。

大会が近づいた頃、香港中国に発生した新型肺炎サーズに脅かされ、直前には本部のあるカナダのトロントに、鎮静化したと思われたサーズの再発に最後まで対策に追われた（講道館岩崎安孝総務部長には大変なご心配をおかけした）。殆ど平行して旧ソ連圏、ブラジルよりのビザ獲得に一時は身元保証人となり、新車はおろか、家まで手放すのではないかと思われる予想債務(?!)に悩まされたものである（プロコ・エアーの小林潔司丸の内柔道倶楽部幹事長にビザ発行について大変お世話になった）。

大会開始

「拝礼」「お互いに礼」の後、形は貝瀬輝夫審査委員長、試合は関根忍審判委員長による注意事項の徹底があり、それが形の場合はアメリカ在住のシェパード・エイコ・サイトウ氏、WMJA福田敬子形顧問審査長代行により、又試合は日本にも柔道留学していたアメリカのポール・タラント審判員により英語に、オーストリアのアイリス・マイヤー審判員によりドイツ語に、更にスペイン語に翻訳発表される。

「形」の場合は、始めの動作、終わりの動作が各国マチマチのため、四競技会場それぞれの形に応じた模範演技が演じられた。

「試合」の場合は、特に本大会はIJF新規定（4月改正）が未だ徹底されていないとの配慮により、3月以前までの規定が採用される旨徹底された。

6日間に亘る大会中、講道館は学校道場であるから講道館ルールを守ってもらうことは勿論、終了時間も表彰式を含めて全て4時半、後片付けを終えて5時には明け渡さねばならないとの至上課題があった。ところが形では多い時に1会場25組、試合でも300人がリーグ戦・トーナメント方式で試合を行うので時間は極めてタイトである。従って、各競技場・試合場の責任者は本部との連絡調整に大童で、時には言葉上の障壁から罵声が飛び交う。アメリカ在住で、親父の一大事とばかり2週間の休暇を取って駆けつけてくれた小生の次男は、本部のボランティアDr.リサ・ブラッドレーと口角泡を飛ばして主管者（日本協会）と主催者（世界協会）の主張で渉り合い、ファイトしてくれて、我が子ながら天晴れと感心させられたものである。

又、各試合場の係員も、学生諸君（東海大・国士舘大・日体大・東京大・慶応大）も普段の大会とは違う異国人の中で大変だったと思い、感謝する次第である。

大会は23・24日が形競技、25・26・27日が個人年齢別体重別試合、28日最終日が個人年齢別無差別及び国別団体戦が行われた（戦績5面別掲）。

開会式

開会式は25日、個人試合開始日の12時より、防衛庁東部方面総監部上田正文二等陸佐のご懇篤なるお取り計らいで、東部方面音楽隊の演奏による国歌「君が代」の斉唱に始まり、大会会長として小生が開会宣言。嘉納治五郎師範により誕生し、121年、187カ国に拡散分家した講道館柔道の、いわば里帰り大会であり、お互い生涯柔道、長寿健康を楽しみ、友情の喜びを分かち合おうと、日英両語で宣言した。嘉納館長より「講道館へ歓迎する」のご祝辞（日英両語）、Dr.ヴァンヘルダー世界マスターズ柔道協会会長の英・独・仏及び日本語の大会公用語による挨拶に続いて、竹内IJF副会長・アジア柔道連盟会長紹介、主管国日本のオリンピック・世界選手権歴代メダリスト紹介（佐藤宣践、関根忍、高木長之助、津沢寿志、山下泰裕、須貝等、田辺陽子の各氏＝順不同）、大会役員紹介、続いて大塚治城東大名誉教授による選手宣誓（同氏は本大会M6・81kg級ゴールドメダリストとなった）があって、次期開催国オーストリア国家吹奏で開会式を終えた。

オリンピック・世界メダリストによるメダル授与

開会式直後に午前中の入賞者にメダル授与式を行ったが、メダリストをプレゼンターにお願いすることは即興で行った。これは以前、〝WMJA役員に開会式にメダリストを呼んである〟と伝えていたが、役員の一人イタリアのクリスティアーナ・パラヴィチーノが、〝そのメダリストからメダルを首に懸けてもらったら、講道館での大会同様、夢の境地になるだろう〟とメールしてきたのを思い出して実現させたものである。（その意味で、小生は山下泰裕氏よりゴールドメダルを懸けてもらう栄に浴し、クリスティアーナに感謝している。）

M8・73kg級で金メダルを獲得した野口氏（左から2人目）

この競技試合・勝負に明け暮れた時代を過ぎ、30代に突入、ある程度心にゆとりが出て来て、あるいは柔道中心生活から若干離れて今般の講道館大会を迎えた。嘉納師範の説かれる「精力善用」「自他共栄」とは何か、「礼に始まり礼に終わる」のは何故か、「柔術」ではなく「柔道」とは何か。これらを求めて今般のマスターズは講道館に集まったのだ。

オリンピックに出場し、その国・その地域を一時期制覇し、今や60歳にもなろうとしている者（テリー・ワット欧州代表副会長）をして、「講道館で稽古し試合が出来るのは、自分の生涯に於ける金メダルに値する」と言わせる何かがある。むろん、これらは柔道を中途にして離れてしまう輩には分かるべくもない…。

両講師による特別セミナーはかかる「道」を求めるマスターズのために設けたものであり、結果として最高の満足感を味わった。けだし、海外よりのマスターズに深い感銘を与えたからである。村田先生の長い海外での柔道指導普及体験から得られた深い思索と学識・見識に接した喜び、さらに「世界のダイゴ」から穏やかに語られる講道館の「形」についての理合の深奥は、2時間のセミナーでは当然全てを理解できないにしても、醍醐先生の警咳に接した喜びが、感動が、必然に伝わって来たものである。平野弘幸、山本三四郎両講道館若手指導員旗手の一挙手一投足にも深く見入っていた。（ここが講道館だ！）（その講道館に今自分がいる…）（講道館に来て良かった!!）。

大会記念誌の発行

大会記念誌については、特に内外から馳せ参ずる生涯柔道愛好家のため、日英両文にて編集することにし、日本を代表する武道愛好家を中心に執筆をお願いした。掲載順に列挙させて戴くと「第5回世界マスターズ柔道大会の開催に寄せて」総務大臣片山虎之助氏、「祝辞」東京都知事石原慎太郎氏、「武道への志」橋本龍太郎氏、「柔道と私」トヨタ自動車会長奥田碩氏、「世界の人たちを結ぶ柔道」郵船航空会長高橋宏氏等々。

特にこれらご執筆を戴いた政財界重鎮の方々は兎も角、特に他の多くの政治家の先生方に、世界に唯一誇り得る日本文化に、世界の国境、言語、宗教、年齢、身分、肌の色…を超えて、嬉々として柔道という共通語を話し合うマスターズ大会をそれぞれご観戦戴き、物・金のみをばらまき配分するのではなく、本当の人心を分かち合う様を見て欲しいと思ったのは小生のみではあるまい。

『これほど柔道の素晴らしさを実感した大会はなかった！』

柔道新聞7月1日号に早速に取り上げて戴いた徳田浩編集長の副題である。

大会終了後、大道場で年度会員総会を開いた第5回世界マスターズ大会は、同編集長の言葉を借りると〝世界マスターズ講道館大会は大きな成果を残して閉幕した〟。

文京会館でのサヨナラパーティーは300人を超えるマスターズ参加者、家族、協力者で立錐の余地もない程の大盛況になった。泉浩三マスターズ会員の日英両国語による名司会で、大会の国別対抗戦の直後だけに、さながら各国対抗芸能合戦の様相を呈した。

先ず、二基の酒樽「金盃」（ゴールドカップ）の鏡割りの後、マスにて乾杯。このマスが、マスターズ仲間の交換記念サイン帳となった。

今回の大会には出場しなかったものの、世界マスターズ陸上で何回も金メダルに輝いた横浜の小野惇6段による、羽織袴着用、長い槍を抱えての「黒田の武士」（白波政即師津軽三味線演奏付き）に始まり、イタリア、ブラジル、アメリカ、イギリス、ハンガリー……、M8・66kg級で銅メダルを獲得したヒゲのアンドール・パポシー（アメリカ）のハーモニカ、独特の帽子に日の丸の扇をかざして笛で応援する大相撲・オリンピックでおなじみの山田直稔国際オリンピック応援団長まで飛び出して広い会場は大賑わい。料理は、試合でお腹を空かしたマスターズの食欲で瞬く間に消えてしまったが、豊富なマス酒を片手に遅くまで語り合い、最後に全員でオールドラングザイン（蛍の光）を歌って来年のオーストリア・ウィーンの松前武道館での再会を期して名残りを惜んだ。

終章

ともあれ長い道のりだった大会は終わった。世界のマスターズ柔道家の「一度は講道館の畳の上に立ちたい」という憧れを実現して下さった講道館長先生はじめ、講道館・全柔連の方々、審査・審判の諸先生方、大会運営に昼夜を分かたずご協力・ご支援戴いた方々、それを支えて戴いたご家族の方々、そして何よりも自費で、勇気をもって形競技に、試合に参加して下さった出場者の方々に、深甚の感謝を捧げて筆を措きます。ありがとうございました。

（註）大会終了後、講道館大会の成功を機に世界マスターズ協会会長に就任しました（但し1年のみと限定しました）ことを、再び感謝と共にご報告いたします。

世界の柔道家の夢「一度は講道館で練習を、試合を…」を実現できたことが最大の喜びでした

特別セミナー

嘉納治五郎師範に学ぶ…村田直樹講道館図書資料部長

講道館の形―投の形を中心にその理合を…醍醐敏郎講道館道場指導部長

600人以上、家族を含めると1000人以上の外国人柔道愛好家が何故この講道館に参集したか？

1882年、嘉納治五郎師範ご指導の下、数人の弟子により永昌寺の八畳の間で呱々の声を挙げた講道館柔道は、アッと云う間に日本より出て世界187ヵ国に拡散伝播し、今やオリンピック競技種目に採用され、サッカーに次ぐ競技人口を抱える国際スポーツとして発展している。とは云え、この柔道の発展は、オリンピックにしろ、世界選手権にしろ、はたまた他の大会にせよ、競技であり試合であり勝負であり、つまり技術が、メダリストをプレゼンターにお願いすることは即興で行った。これは以前、〝WMJA役員に開会式にメダリストを呼んである〟と伝えていたが、役員の一人イタリアのクリスティアーナ・パラヴィチーノが、〝そのメダリストからメダルを首に懸けてもらったら、講道館での大会同様、夢の境地になるだろう〟とメールしてきたのを思い出して実現させたものである。（その意味で、小生は山下泰裕氏よりゴールドメダルを懸けてもらう栄に浴し、クリスティアーナに感謝している。）

この競技試合・勝負に明け暮れた時代を過ぎ、30代に突入、ある程度心にゆとりが出て来て、あるいは柔道中心生活から若干離れて今般の講道館大会を迎えた。嘉納師範の説かれる「精力善用」「自他共栄」とは何か、「礼に始まり礼に終わる」のは何故か、「柔術」ではなく「柔道」とは何か。これらを求めて今般のマスターズは講道館に集まったのだ。

オリンピックに出場し、その国・その地域を一時期制覇し、今や60歳にもなろうとしている者（テリー・ワット欧州代表副会長）をして、「講道館で稽古し試合が出来るのは、自分の生涯に於ける金メダルに値する」と言わせる何かがある。むろん、これらは柔道を中途にして離れてしまう輩には分かるべくもない…。

両講師による特別セミナーはかかる「道」を求めるマスターズのために設けたものであり、結果として最高の満足感を味わった。けだし、海外よりのマスターズに深い感銘を与えたからである。村田先生の長い海外での柔道指導普及体験から得られた深い思索と学識・見識に接した喜び、さらに「世界のダイゴ」から穏やかに語られる講道館の「形」についての理合の深奥は、2時間のセミナーでは当然全てを理解できないにしても、醍醐先生の警咳に接した喜びが、感動が、必然に伝わって来たものである。平野弘幸、山本三四郎両講道館若手指導員旗手の一挙手一投足にも深く見入っていた。（ここが講道館だ！）（その講道館に今自分がいる…）（講道館に来て良かった!!）。

情報断片

○…油断して夏風邪を拗らせ、福岡の金鷲旗大会取材は辛いよりの薬になったようです。その上、真夜中にバルセロナから送られる水泳の世界選手権生中継に興奮の連続、20歳北島康介の2種目世界新記録金メダルは本当に見事でした。すっかり嬉しくなって、深更に1人で祝杯を挙げました。

○…熊本・長崎の水害、宮城の地震被害、民主党・自由党の合併、フセイン元大統領の息子殺害・死体公開、イラク特措法成立などなど、少し東京を留守にした間も世の中は揺れ動いています。女性議員が絡んだ国会乱闘劇にはうんざりしましたが、国民の大きな力で、自衛隊の海外派遣を阻止する必要を痛感しています。唯一戦争を放棄した日本だけが、さらに、世界に誇る柔道の宗家・日本だけが成し得る、世界平和へ貢献する方法があるはずです。

○…世界マスターズで見た世界各国熟年柔道家の温和な表情が脳裏に焼き付いています。総まとめは野口宏水会長にお願いしました。世界平和の為にも一石を投げられました。

○…僚友「近代柔道」のK編集長が編集後記で勝ち続けるタイガースに触れ、「虎ファンは野球を楽しむ達人揃い」と、お世辞とも皮肉とも受け取れる洒落た表現をしていました。ただ「優勝決定日が世界選手権と重なったら困る」と…。「何とか早めに決めて、虎ファンにもゆっくり柔道を楽しんでほしい」。同感です！同感です!!。世界選手権まであと45日、トラのマジック34。どちらも秒読みです。（徳）

記録にひとこと

＝金鷲旗大会＝

金鷲旗は今年も男女476校が出場し、終始熱気溢れる好試合を展開した。この大会の記録は不戦○人と表示しているが、本来勝ち抜き戦は○人残しと表示すべきだろう。先鋒5人抜きも、4人抜き5人目引分も記録表示は不戦4人となる。正しくは前者が5人残し、後者が4人残しでなければなるまい。本紙は従来からこだわり、時間を掛けて本来の○人残し表示に変える作業をしている。

もう一つ、決勝までの全試合を通じて勝敗の内容を関係者や報道陣に示されない。一本なのか（一本なら技名）、技有り・有効勝ちなのか、反則勝ちなのか、直接取材した試合以外は全く分からない。折角各試合場に多くの記録担当者を配置しているのだから、健闘する選手の為にも、せめてベスト16以降の対戦は克明な公式記録を残す工夫をすべきだろう（各都道府県高体連は年々記録を充実させている）。

本紙は金鷲旗を名実共に世界一の柔道大会と評価し、全日程を通じた取材を継続しているが、それだけに記録の面ももっとこだわりを求めたい。1・2回戦でも今年も素晴らしい3日間だった。強いチームも、弱いチームに関係なく、素晴らしい高校生から多くの感動を与えてもらった。1回戦で消えたチームも、この夏の汗と涙を一生の糧にして逞しく生きて欲しいと強く思った。（徳）

訂正とお詫び　前号書評中、恒文社受注センターの電話番号に誤りがあり多くの読者にご迷惑をお掛けしました。正しくは025―780―1231です。お詫びして訂正します。編集部